

「十三日間の

訪中体験」

鹿留 梅谷辰彦



私にとって中国は学生時代にその歴史を専攻したことから一度は是非行ってみたいかつた憧れの国でした。それ故、昨年十月下旬から十一月上旬にかけて十三日間、第五回日中友好青年の翼に参加でき北京・西安・成都の都市を中心に生きた中国の一端を見聞できたことは非常にうれしい出来事でした。話しに聞いている名前所旧跡のすばらしさは言うに及ばず、それ以上に毎日出会った中国の人々の素顔がどの人も想像していたよりも自由で個性的なものには強い印象を受け、まさに百聞は一見にしかずと思えました。

各滞在地のホテルでは、従業員と親しくなり、彼らが仕事をしながらも外国語(特に

日本語)を勉強している姿には感心いたしました。また早朝、街を散歩するとお年寄り達が各所で街路を掃除したりマラソンや大極拳をしている光景に、何か私達までが背筋を伸ばさずにはいられない様な気分がさせられました。

それから、食料の自給自足体制を目指す中国では、畑と畑の境である畔にも作物が播かれ、首都北京でさえも空地は言うに及ばず、塀の基礎として土盛りをした所さえも雑草を取り小麦が播かれていたのには驚かされました。しか

し、日本に比べて中国では化学肥料や配合飼料の分野でも発展が遅れていると伝えられています。食卓に出てきた料理には自然の旨味がある様な気がしてどの食べ物も美味しく安心して食べられました。十三日間の訪中体験を振り返ってみて、文革等の厳しい政治の嵐の中をくぐり抜けてきた中国人が今現在何を考え毎日を通してののか、同時代を生きる一人として言葉や体制を超えてじっくり話し合い

がもっと出来たらよかったです。にと思えました。

日中友好

訪中青年の翼に参加して

「私の訪中雑感」

中央二丁目 水野民子



旧日本軍が中国への「侵略」を「進出」に変えたという教科書検定問題が日本の世論を賑している最中、そして日中国交回復十周年という記念すべき年に中国を訪れることができ本当にラッキーだったと思います。最初は、反日感情が強まっている中国で私たちを心よく受け入れてくれるのだろうかと一抹の不安を抱いていましたが、いざ中国へかどこへ訪問しても熱烈大歓

人民公社の養魚場にて(成都)

▼手にもっているのは「まゆ」です。



迎されて、本当に中国へ来て良かったと思えました。

各都市の自由市場では露店のおじさんたちや買物をしている人々が気軽に声をかけてくれました。

また、四川大学の学生たちや日本語を独学で勉強している勤労青年たちとの語らいを通じて、さらに「北国の春」のメロディーが流れている街並を歩いてみて、中国の人々は暗い過去にはこだわらず、日本に対してはむしろ親近感さえ抱いていると感じられました。そのうえ、日本の経済生活水準に追いつこうと必死になっているのが私にも伝わってきました。

中国はたしかに遅れている国ですが、これからスクスク

伸びる若い国です。この若い国を自分の目で見、肌で感じる事ができました。毎日、毎日が新しいものとの出会いである何ものにも変えがたい貴重な十三日間を過ごすことができました。このようなチャンスをつくってください。すべての皆様に心から感謝しこの貴重な体験をこれからの活動に役立てたいと思います。

